

# 一九九七年出土の木簡

## 概要

一九九七年にも全国各地の多数の遺跡から木簡の出土が報じられた。本号では、昨年の研究集会で「一九九七年全国出土の木簡」として報告した遺跡を中心に、計六四の遺跡出土の木簡についての情報報を掲載することができた。貴重な時間を割いてご執筆いただいた方々、ならびに本誌への情報の提供を承諾された関係各機関に対し、心からお礼を申し上げる。

さて、出土木簡の概要を、以下簡単に紹介する。

まず、七世紀の木簡としては、細工谷遺跡、金石本町遺跡、観音寺遺跡、及び本号には掲載できなかつたが、飛鳥池遺跡のものがある。特に觀音寺遺跡の木簡は、国や国府の成立過程を在地の史料で解明する手掛かりとなるもので、律令制成立期の中央のまとまつた史料である飛鳥池遺跡の木簡とともに、全貌の公開が待たれる。

都城遺跡では、平城宮・京からの五〇〇〇点に及ぶまとまつた出土がやはり特筆に値する。ほとんどが道路側溝の遺物であり、廃棄

元の特定は難しいが、「嶋坊」の倉のキーホルダーや「前分」の荷札、「後呂務所」の木簡をはじめ、個別には注目すべき木簡が多数含まれる。同じ側溝の遺物でも、一昨年の研究集会で報告のあつた長岡宮の木簡は、春宮坊関係木簡として内容的なまとまりを見せ、総じて廃棄元の特定が難しい側溝の遺物としては稀有な事例といえる。平城京跡右京二条三坊七坪の「山背国京都」の削屑は、断片的な情報からさまざまなることを考えさせてくれる。削屑の醍醐味ともいべきか。墨書き土器によつて遺跡の性格を右京職と解明できた平安京跡右京三条一坊三町からは、弘仁七年の紀年のある題籤軸が出土している。

地方官衙遺跡では、下ノ西遺跡の公出拳や国司借貸に関わる木簡や越後国から書き出す荷札木簡、三輪田遺跡の相模国の軍団名を記した木簡があり、遺跡の性格を考える重要な素材を提供した。払田柵跡からは「北門所」と記した木簡が出土し、墨書き土器とあいまつて「北門」の名称が当時に遡ることが明らかになった。この他古代の注目すべき木簡としては、上長野A遺跡の郡家が税長を召す大型召文木簡、山田遺跡の「和名類聚抄」に文字の異同があつた出羽国

1997年出土の木簡

遺跡名	所在地	点数	木簡の年代	遺跡の性格
平城宮跡	奈良県奈良市	4238	古 代	官衙・都城
式部省東方・東面大垣		14	古 代	宮殿・都城
東院庭園		25	古 代	宮殿・都城
東院庭園・二条条間路				
平城京跡(1)	奈良県奈良市	526	古 代	都 城
左京二条二坊十・十一坪・三条条間路		32	古 代	都 城
左京二条二坊十一坪		54	古 代	都 城
左京二条二坊十一坪		139	古 代	都 城
左京三条一坊十四坪		21	古 代	都 城
右京三条一坊三・四坪				
平城京跡(2)	奈良県奈良市	1	古 代	都 城
右京二条三坊七坪		1	古 代	都 城
右京三条四坊十坪				
※ 青野遺跡	奈良県奈良市	16	中 世	集 落
藤原宮跡	奈良県橿原市			
西方官衙南地区		1	近 世	官衙・集落
内裏地区		1	古 代	官 衙
※ 酒船石遺跡	奈良県明日香村	28	古 代	官 街
長岡宮跡	京都府向日市			
○ 東辺官衙・春宮坊跡		467	古 代	官衙・都城
北辺官衙南部		1	古 代	官 街
長岡京跡左京二条四坊三町	京都府京都市	2	古 代	都 城
長岡京跡右京六条二坊六町	京都府長岡京市	2	古 代	都 城
平安京跡右京三条一坊三町	京都府京都市	4	古代・近世	都城・官衙
※ 平等院庭園	京都府宇治市	15	中 世	寺 院
※ 細工谷遺跡	大阪府大阪市	5	古 代	都城・寺院
大坂城跡	大阪府大阪市	1	近 世	城 郭
※ 天満本願寺跡	大阪府大阪市	10	近 世	寺院・城下町
○ 塙環濠都市遺跡	大阪府堺市	1	中 世	都 市
※○東浅香山遺跡	大阪府堺市	5	中 世	集 落
※ 猪名庄遺跡	兵庫県尼崎市	2	中 世	莊園・集落
※○屋敷町遺跡	兵庫県三田市	1	近 世	寺院・城下町
※○加都遺跡	兵庫県和田山町	1	古 代	集落・水田
明石城武家屋敷跡	兵庫県明石市	2	近 世	城 下 町
※○境谷遺跡	兵庫県姫路市	1	古 代	河 道
※ 茂利宮の西遺跡	兵庫県中町	1	中 世	集 落
※ 安坂・城の堀遺跡	兵庫県中町	2	中 世	集落・居館
○ 大將軍遺跡	滋賀県草津市	4	古 代	官衙・河道
※ 大脇城跡	愛知県豊明市	9	中 世	居 館
※ 瀬名川遺跡	静岡県静岡市	1	中 世	集落・水田
※○明治大学記念館前遺跡	東京都千代田区	24	近 世	城 下 町
※○千駄ヶ谷五丁目遺跡	東京都渋谷区・新宿区	19+α	近 世	城 下 町
※ 山崎上ノ南遺跡B地点	埼玉県児玉町	1	古 代	集 落
※ 西原遺跡	千葉県袖ヶ浦市	1	古 代	集 落

松本城三の丸跡小柳町	長野県松本市	4	近	町	町
松本城下町跡伊勢町	長野県松本市	8	近	衙	落
※ 三輪田遺跡	宮城県古川市	1	古	市	市
※ 一本柳遺跡	宮城県小牛田町	1	中	下	下
志羅山遺跡	岩手県平泉町	38	古	城	下
※○三条遺跡	山形県寒河江市	1	古	城	官
上高田遺跡	山形県遊佐町	13	古代	集	都
※ 山田遺跡	山形県鶴岡市	2	中	落	落
払田柵跡	秋田県仙北町・千	8	古	集	落
	煙町		古	落	落
※○大光寺新城跡遺跡	青森県平賀町	65 + $\alpha$	中	代	館
福井城跡	福井県福井市	102	近	城	町
○金石本町遺跡	石川県金沢市	3	古	下	道
戸水大西遺跡	石川県金沢市	3	古	官	河
※○堅田B遺跡	石川県金沢市	15	中	集	園
※ 七尾城下町遺跡	石川県七尾市	1	中	居	館
※ 蛇喰A遺跡	富山県井口村	3	中	城	町
※○二口五反田遺跡	富山県大門町	1	中	集	落
※ 清水堂F遺跡	富山県富山市	1	古	代	落
※ 下ノ西遺跡	新潟県和島村	8	中	代	落
※ 中倉遺跡	新潟県中条町	4	古	代	落
※○大御堂廃寺	鳥取県倉吉市	8	古	代	落
三田谷I遺跡	島根県出雲市	3	古	代	落
※○有福寺遺跡	島根県津和野町	1	古	代	落
※○高田遺跡	島根県津和野町	2	中	世	道
※ 百間川米田遺跡	岡山県岡山市	3 + $\alpha$	中	世	落
※○津寺遺跡	岡山県岡山市	1	中	世	設
※ 末原窯跡群（灰原上層）	山口県美東町	1	中	世	道
※ 萩城跡（外堀地区）	山口県萩市	29	近	城	河
※○高松城跡	香川県高松市	1	古	下	施
※ 観音寺遺跡	徳島県徳島市	14 + $\alpha$	古	官	河
※○上長野A遺跡	福岡県北九州市	1	古	代	道
香椎B遺跡	福岡県福岡市	3	中	代	落
○博多遺跡群	福岡県福岡市	1	中	世	市
※○魚屋町遺跡	福岡県久留米市	7	近	城	町

※は木簡新出土遺跡

○は1996年以前出土遺跡

田川郡の郷名がみえる木簡、戸水大西遺跡の「殿門御稻」に関する解とみられる木簡、加都遺跡の但馬国朝来郡の里名から書き出す木簡、西原遺跡の朱書きの呪符などがある。靈龜二年（七一六）の酒船石遺跡出土木簡、宝亀五年（七七四）の山崎上ノ南遺跡B地点出土木簡、天平感宝元年（七四九）の三田谷I遺跡出土木簡などの紀年木簡も注目される。なお、後者は、地方出土木簡では数少ない○一五型式の木簡である（但し、現状では孔は下端にある）。

中世の木簡で特に注目されるものに、堅田B遺跡の巻数板がある。文献・絵画資料や民俗資料が、考古資料によって実証された類い稀な事例といえよう。中世の紀年木簡としては、茂利

宮の西遺跡の桶の底板に転用された觀応二年（一三五二）銘の木簡、

大脇城跡の武運長久を祈った天正四年（一五七六）の護摩札がある。

中世以降の木簡の一潮流を形作るものに、呪符、卒塔婆、柿経がある。昨年も各地で出土が相次いだ。呪符には、猪名庄遺跡、安坂・城の堀遺跡、瀬名川遺跡、一本柳遺跡、蛇喰A遺跡、高田遺跡、末原窯跡群の事例がある。このうち高田遺跡の呪符は、地鎮遺構に伴うものである。卒塔婆には、青野遺跡の僧良繼の年忌供養に伴うもの、東浅香山遺跡の施餓鬼会に伴うものの他、志羅山遺跡、上高田遺跡、蛇喰A遺跡の事例がある。中でも戸井に転用された青野遺跡の卒塔婆は、その再利用の経緯にも興味がもたれ、また旧平城域からの出土という点でも、藤原宮域から出土した近世木簡とともに注意を喚起する。柿経には、平等院の無量寿経・觀無量寿経、大光寺新城跡遺跡・百間川米田遺跡の妙法蓮華経がある。

近世に入ると、再び木簡はヴァラエティーに富んだ内容となる。

従来大坂城跡からは多数の近世木簡の出土が知られていたが、近世木簡出土遺跡は近年激増し、近世の木簡使用の普遍性が明らかになってきた。昨年も大坂町奉行所与力屋敷跡の時期の天満本願寺跡の他、旗本・御家人屋敷地を中心とした千駄ヶ谷五丁目遺跡や

明治大学記念館前遺跡など江戸の遺跡、屋敷町遺跡、松本城三の丸跡小柳町、松本城下町跡伊勢町、福井城跡、萩城跡、高松城跡、魚屋町遺跡など、各地の江戸時代の城跡・城下町跡から木簡が出土し

た（天満本願寺跡出土木簡には竹製のものが一点含まれ注目される）。

内容的には荷札木簡や容器の墨書が目立つが、高松城跡の帳簿様の木簡などその内容は確實に豊かになりつつある。また、昨年の近世木簡で特に注目すべきは、文献史料や絵図で住人を特定できる場所からの木簡の出土が相次いだことである。木簡の文字にくずし字が多く解読が容易でない場合が少なくないこともあいまって、近世史との密接な連携が要求されよう。近世木簡の増加は、発掘事例の増加とともに、近世の「墨書のある木製品」が漸く木簡として広く認識されてきたことの結果でもある。文字の普及と公私を問わぬ木簡の利用によって、木簡のヴァラエティーという点では古代にも勝るものがあり（それだけ体系的な理解が難しくなっているともいえるが）、近世木簡学が今一つの大きな画期にさしかかっていることを予感させる。その際、中世の木簡のあり方をどう理解するかは大きな課題となろうが、例えば一六世紀の戦国期の七尾城下町遺跡の付札木簡は、近世木簡の「隆盛」の淵源が、少なくとも戦国期にまで遡ることの現れといえる。一乗谷朝倉氏遺跡や草戸千軒町遺跡が特異な事例ではないことが少しづつ明らかになりつつあるといつてよいであろう。

釈読の難しさという点では、昨年は仮名書きの木簡の出土が目に付いた。一〇世紀から一世紀にまで遡る大将軍遺跡の仮名書き文書木簡、中世後期の一六世紀代の津寺遺跡の絵馬にみえる墨書、一

六世紀末豊臣前期の大坂城跡の文書木簡などがある。ことに大將軍遺跡のものは、表面から裏面まで書き進んだ後、再び表面と裏面の余白に書き継ぐという、仮名書き書状の散らし書きに類似した書式で記しており注目される(大坂城跡の木簡も同様の書式の可能性がある)。以上、本号に一九九七年出土の木簡として掲載した木簡の概要を私見によつて述べた。触れるべくして触れ得なかつた木簡も多く、また木簡の史料的価値を曲解している場合のあることを危惧するが、ご寛恕願いたい。

なお、当会では一年間の木簡出土情報をその年一二月の研究集会

で報告し、これを翌年一月刊行の本誌に掲載するのを原則としている。しかし、さまざまな事情によつて研究集会で報告できなかつたものを本誌に掲載したり、あるいは逆に研究集会で報告しながら本誌に掲載できなかつたりする場合が遺憾ながら多数生じてゐる。

昨年の研究集会で報告した遺跡のうち、兵庫県兵庫津遺跡、宮内堀脇遺跡(一九九六年度調査)、静岡県水守I遺跡、元島遺跡、東京都溜池遺跡、四谷御門外橋詰・御堀端通り・町屋跡、法光寺跡、池之端七軒町遺跡、長野県屋代遺跡群新幹線地点、石川県金石本町遺跡(第三次調査)、新潟県新堀村下遺跡については、本号に掲載すべく

して掲載できなかつた。また、奈良県西橋遺跡、太田遺跡、京都府平安京跡左京七条二坊八町及び本園寺、同左京九条二坊十五町、御土居跡、兵庫県赤穂城本丸跡、時友遺跡、姫路城跡、滋賀県大将

軍遺跡(草津市教育委員会調査分)、東京都汐留遺跡(汐留遺跡調査会調査分)、白鷗遺跡、江戸城跡和田倉、神奈川県佐助ヶ谷遺跡、岩手県仙人西遺跡、長野県榎田遺跡、山形県大道下(旧月記)遺跡、福井県福井城跡国際交流会館地点、石川県木ノ新保遺跡、四柳白山下遺跡、新潟県牧目館跡、平林城跡、春日山城跡、伝至徳寺跡、広島県尾道遺跡については、本号にも掲載できなかつた。なお、奈良県飛鳥池遺跡、滋賀県宮町遺跡、宮城県市川橋遺跡については、整理中でありしかも近接地を調査中であるので次号に合わせて掲載する予定である。

正確な釈文を提供することが本誌の使命ではあるが、最新の出土情報を提供することもまた重要な役割の一つと考える。掲載すべき号への掲載を一度逸した遺跡については、改めての掲載がなかなか困難なのもまた紛れもない事実である。最新情報の収集と公開について、関係諸機関や担当者の方々のさらなるご協力を改めてお願い申し上げたい。本誌は関係諸機関や担当者の方々のご協力があつて初めて成り立つ雑誌であり、木簡出土情報の公開、そして検討の場として、本誌を十全にご活用いただければと思う。

(渡辺晃宏)